



~利4
8.859
卷



太氣陵是家集拔萃

大官の三也のう霍比鳴妻の伐園て

題一　ら夢

まちくればを庭をひく小山田の牆つをもさううがとひにひな久
ちともこのはくわせびてひへつきうけぞなくあるもそこそる日ア
ふどとうかごとくいすれどせとうホ稚菜つむよかとじすのバ
うきもひれタキトクれど小山田ア蛙かくちうら未しるゑア
春はもはつてのう櫻やく水ア芦の若な人いそぞうせ
たつちの秋のはづくし春をねりめ地のさはうすみこをぐく

あはへーなハレ水アカルモ残ちうくみれバカシカモ行ク
沈セ木アヌモ鷺比巢ヒミクルモ親ナム跡モのもれアヌミキ
シモスのほごモトタマツテ被一テ

ううウケルとのくもく舟ヌハヌム大海オホシマガシイカ一ヌるちてん
むづヨハスルトモスベクナドウシ

あいとやくまきの神アヤシハ努モジアリベシモハ東ホキモ
初モハヌアヌ并經

久うミ比天の戸カヌ日ノ秋比られモハモリヌナヤケテ行ク先ヌ
残向言モの也ニテア朝じこの大海原カ千ミ波モちヨモサヌ
わきハミ雲をちよだ一ナミ四方ヨコヤメハ表ハテシモアシモ山ハ霞色

紀河又れ巴川せぢヤク百たゞすハナのちまハ八十國の入つと
まく千代ようつの宮並アソブトモキテアシテシテシテ純を
ヘリエアシ竹玉シカツタツムニキれ行地のヤ遠ナガク一ナヌ勞
由君う拂國ハ國アツク人らハなれど今アシテ代までふいの
教ゾカヌト皆神乃モヘ

モモされば行くたずれどといせの上ぬはさゝへをつりて一ぬじつ
七の弓并短哥ニタク

冬う雪モナシテアスモ不つくおうも春のまだ常アツる
もの残みナム風はく一時バ麻よすまうのあじかすて寐

をテもおす妻などヒトセアリてくうきのなる様ぞすむ風
をくいりてゆ一をすも峰やといふ色こどもれよおうそ
ニモはめれもあとみなづくと嘆仰るもとこれつてきみを
うけうちをなまきハナクスホの雪は、更士の峰とよドみれば
不二もみのとをつくぢの峯かやーとさくらみれば峰とよえ
久堅のらるギツヒツよねりーらゆ

言されば、あとくく黄鳥ちうとすれやもはまうちぐてふ
ロや高しナツとるをほじき像のらめに下るふくわからむ

右大将北君ヤドセ峯ヨミタリヨ國をさる上玉たる

幸寺モウラ真章カイキヤの招き備序つとひきみのうせ

らくらく山城櫛ノレシ印のえちまくやドリするも
行引のとみ神立リたまくしきうりらはるも専なしとせ
黒古皮ノむちうつぶだにられき一猪ノキサレ^ハ仁田セ美能
セモヤクセモヤクセ^ハ山の弓^ハいをとくそれどとけりえす
がふもせとくたぐうとく殊流向あるやつのすとくせとく思も
大井川北ゆくらくを見て

咲一ノリツヅリモ行くで散るもはも行くせやややもも見ん
渓みづまちとふ花ゆやくあぬは風立リもむくとがのとみん
チをじく春よとらる行けり山すりゆちのはなむらまく

高臺寺の老木のまくとみ見

かくせをすくやめんこくもかくも千やおせ春によ
もかふのうとうむへ年のはくやつとくさんをさうゆ
善阿大ふくまほりとくてもちひそくよみのをち
く種族とちつてよゑる

いきのじややすくぞくは後世のものうじめうらく
道うようす祝

天つちせでくわねど玉鉢比道のいうへ代うつよし
ほくはりあくさくのとくとくわゆいのとくさきのみち

更衣

夏のきりがる衣ぬはるをばもとももとく

をぬきうれきくぬしめごうへまがみうのせう見ん
ほとしきす

かたうすと帝とくきくはくにいくぶせうへすまくん

をぐうもくうきのハはせかすおとと定免ん里もる

櫻町院北席陵をね

日アじくらまのうへとくふくおもくれすてやへじく

瀑布

も上ハせこふもへうすくらやせようち峰とくおとくつが

らじくよぢきくもとみやくふかくろよなほく瀧のへう

五月 る

りきうご守は、因故もよほぞこえとをやみをもるゆきするのを
ふくわの山田比水となまう江ノ首をそひすれらみのうち
有尚は妻翁よかうて早へうりてし世よ書おりも形見の
せうてまくりしも

星月れ月行も山もめりてゆくがぞかな
あやのくわおこでまちおーもよもの中津のかま
ア奉モリシ小浦をまへタマニスル
梓うおーくつくわみかわむよのけやねほひかる
ヌツモクウヨウムツヒトハいをとよまで仕へる事多ヘア
さみうますかふとくじくまもんこまくら

波月橋をくぐめば

ぬむものよらるらむ月のけり
ちうづせはまく行へすま

ち頬川

えりも林風すまぬ舟をぐる漁のあらつまでいじく見る
秋木のやせりよはぢくさうつやみの家衣半ばうごく
三野山中よゑむとて雪アト向ひく
秋風のちもぐくへじくとも人の樵モおりる真木アト高モ峰
とほ山アトカムヘシキモチなげよ此の山をもよおせり
時ぞくく萩山黄葉もぢうるのみまきとこくもすりもよ

卷之三

山うはのたまひ言ひ、一いづきひすの写声すくらむそぞう
人りに行ふみれどもさうあく若嬢アソブの江戸ち春ヒナツ—おもほひ
ゆめかへや春よらるとまくせばの母ちみくのれをおがん
こうさかなる小濱シマツカアヤツミ見ぢきりばげのせくわ船きほる
かもの羽のまき葉の山ヒラタケやねにえとんとやけりなづま
山のまよかくまでもとも月ムツアモリヒテキ宵あうる
芦スズクまくみちくら潮アシカツアシカツのくまみかねを駆免モチツクてく見く
むすまうる時なくあまうへこまひの月ムツアシカツ月ムツアシカツ
月ムツアシカツ山ヒラタケアシカツ大海シマツカのゆーほまもこひたるたん
網モモリアシカツ川シマツカ入る帆ハタケハ浪華ハタケの月ムツアシカツ月ムツアシカツ

西は浦の小いとくらしめすのハサウメハサウメアモリシ
梶乃日れすみくまきくメなまき小大津シマツカのみちの漕ハタケアシカツ
舟ボウアシカツれるつくづく又アシカツアシカツを淡海シマツカ原ハタケアシカツがれぬ
よの國シマツカなる何アシカツアシカツ家ハタケアシカツのよもじりアシカツ
アシカツの勢アシカツアシカツ秋ヒナツアシカツ京シマツカの月ムツアシカツ月ムツアシカツ
竹スギアシカツするは
たけもくらむあら海シマツカ帆ハタケアシカツ千世ハサウメアシカツ人ヒトアシカツ
なよひアシカツ人ヒトアシカツ
あ人のやうのちふ降ハシマリアシカツうてきみやくらん
言アシカツのらへよあは

大はうやまくほろしかやあはるぬれりへうやまえうねま

高祖小て

もりのをのむとおひしもとふ高尾山もみちらじこまう

心野ふく

けやよすじくせう杜カノ有うげに野のよみぢきそひアノモ

やくお着

をやさくもやなんくせうはるもくまつハたまくはのまと

春め妃ノ

春はれども風よく松の枝すぬれの沫やうちり小り風のも

豊あは牛津の君めにいきをゆきて奉れる

天づちあひしキーハルカ聖ミ三神らもう深はーの上アーモ
サリは形乃天のとおこせはーおろしらぐ縁へハモウギの
おのこねーま残なセーうーと云国中の佛柱とけどももて定
じきの山城もうキ稻む、川をもうはーちりやか神のみ
もとをいやつざくみばざくまひ天の下伏せたまく民ま
哉をくへるもじぬその神の、お絆りよにえんこのゆみ
あづはらじきをいはいかくよみあじまん神のみをと
おぬもくえめのきみ我わざくとみくま
よモあくとみシテハくと神ハセマジー告もせめがえんきみを
きみイつよてば

よきをばくすまほけつておそれぞ

防人^{守人}す乃^はぬ一すけとて東へゆきよせ遣りて

大君のまかとのしこみ島うもくの妻の江戸がまくわらひ
ちこにはうちお花の笑めはうすすはまざひよたてま
ゆすはむきさなせん約乃にがまびやまらざつ到来よ
しの飄形の都^スハだれどもすと大塚すわねどもくせ
あもよとめづるとらふやつて徳とくとく太刀^ハもやまや
きよおきよめくにあくちがうのう難いふるもくぬぞ殊
セ来^ハ門^ス猪^トもじばをう伏^マもくいすもす^ト阿^ハル
ち雄^ハもみはもりてすをく内^ハ根のけとくもみひバ秋はみの

袂ぬる妹^ハくらむす急まひもくらふ霄^ハばくすのサナリもく
なす赤裳^スみすて荒^レ地のほきなどもそぐふくわきて
ゆくすたはくよ酒^ハくとえ伏^マくとすほじてくく
もおほにん時^ハ故^ノ卿^をおとほーりうやーすせす月日のか
バ^ハとじ衣^ハくらのけとくふかくはやくとほじるらぐなぐ
とく見^ハゆく往^ハやタと

ぬでよ^ハくすぐのをくふゆる雪^ハ枝標^アのけの君^とこばべ
五十石^ハまつ二つ^ハ駢^イ野^チ玉^ハま行^ムてややくさん^ハ
まの巻^ハまくみもくとくやうてきまくく散^ハれ

うべくもむちうそのみれの山きく釐乃葉ごめれるものもの如
花ハトヒはやくそもれる官乃相のセテ、まことほえのりのりハ
ものもかくおいつぱりするなぢせあくねのうとくじをわ
くすりたゞせ花セトムトツが又くよらもくおば
華ハキ用ヒシキモヒのヒトシヒシキレをみててててて
いれをり、がおきハおぢふ代アシモハおばふよつてな
んけむじとどめる

かくとくせしる稿をもとせまおもをべへ老の身キヒ
年のみをいたるをらくのわくでくわるのりくは 伎都
三五そまつ六つのよもひをほざく

三十才よりおとせぬまよん你ちとせも我さへほつそほうじとせよ
薰せ殿堂を称すあは

而一がちる浪華の濱ア家作ア佐さく人の家の名残何一とせ
いふもの薰せ殿、ア茂さくひとそめもぬ廣、さうぢと家の名ア世
ヨモト一也くよのーを人ぞよひとてたる神社者よだくしきよ
すがくみ見るはれまこの河のをハ

かくも大わせふといそのからゆきよとよぶじと、おおひや
中津乃君けちの多事アモのとくにひきるやく

す

一らぬ日のつゝのくちとだりやく中津乃君けちのよやく

國を民やのやうなま玉ぞとみ^{サカ}^{ナカ}の春のしわざハかくひきり丈
うきよきにせんめくすとく頃ハぬじ珠のじよくもほそくわくモ
川とすみ秋をハ橋とすまたもあくも業をすれ
てあそびつゝまわれどうきをあじゑもねばでらとせきのこぐ
のいとまの時ふもむよの八十伴の男力をあてきて國中みま
ちのきと栗をじきの小鷹して少しこの田居よしと稻
ももきの大鳥アシメテメはればくアリと海原を
きぬの月とちゑを見ぢるひくもばくのまをおぼくと
ぬじはすよアリはうごの後を理らともむくすせ、
おほすうち日の三島あらひみくわくりてく

びかすわおよわくよとほぢのめぐらしもいと
つみのようくおとわじきうさみを天やあふもつらとや伏え
君うへらす二國すすめどんぐのも命ハ一のじき

中津のよだれ、くまノリキホモ
夏のよだれ、ややかなれのよみドクタケトキシテ
空戸の若日、くわくわくをくつてみてもり所ハ浪華
うらたうりれバ

ほくよくやかくふくらみつめやいとねもん

八瀬の川乃蛙をかくそもくもく

山の白や茅川太郎、こきなれよじづちれるかとばく

古代の事歴を寫る

ぬとよもとわばかとやの

東乃方ほくわかとやの

いもがくわなまくわはうれととやかやかふくとゆ

よひの山はとすらじもと山はうにまくわとく

松契延齡

千ヤアモアヒヤトムキ人松ももせんを

キムリカヤミサシ前國へあくとてとを

さく浪の珠ヤシタマハ波つみの神おもすえもむきまん

壽鶴祝

つまむ松よそひてすもまん千とまくみん人のよ

能保せと

三月をとくの月日を祚うせの伊勢の能保せ三とび春

た川まや今いとまうた川お田玉稻あいホリナサ莫ナた

坂の

かやと鐸鹿乃聞ハアモヒヤモヒヤモヒヤモヒヤモヒヤ

晴ひのひ

ぬとよもとわばかとやの天澤キテキイとれよ

橋の枝直ソモのすけ辞をくくとみてねうる

よきとよき

即とよきりすふわくらむとくのまよひうりさん

官ぐりあゆのかへる

神、さよび十繩うやんとメなうと舟ぐりとみだりては
歌、ぬちたもみすけにゆくのえうきを魚やくとしを
珠衣、きみのうふらいとすとがはせうふらじよざるくを
清、まゆうひゆうゆうゆうづちの鳴海のうめいさくわも
比呂、役め、うつよじする玉あくまくしておこまく
をこく

よかじの壁をもなくくぬも玉おれまくさうせうよかき

ち枝め、一いつまへ行を送る

うちの母をすおむわうす乃妻代もおまくやうめなまう遠く
ゆんと、酒を三輪の山え石上ゆかへやうむの日の
春日伏すきてらまし、本津をすほきて内日さすみやあホ
ホーでそう常あくいに於かしも帰まんと其のまゆは
そと侍ん若くまの嬢ぞとまんこれ、もとまくも
天なるやまと棚はくみをすと妹すとん故け、をくべ
加茂川のけのよ右間ア、やどる人のあまくもをく
まくわくわくも

奥つやくかしの河床、うよやまの外室ア、あくまくも

が手川を手の川へめぐらし奉れども人の朝川とちがひ
の手河ともいふててかじてかられど橋守もとすまわん
道ちのまことどもなむりてやうすかくもくにけりもものい
そめにはじかとあらすりやよ人ハ太刀のへだちやまとそ
ねど朝さうのはじかとあらすりはぬぞゆのくわき衣をまくにけり
やでそらるそらじかとほをそらがとおとせますよ水
よの半がつゝ廢アハカレホをそらがとおとせますよ水
や灌えんぐまくまくとくもひうる玉乃緒のひうちをなして
水をもたとてらへとひのひつる

川の三章うゑすつてうやまことなむ太刀も葉くわりくふ

うつぢみ妻よばへおとく早川の瀬アはす難と契うやゑ
小もやし氏の家ヤヒトヒトヨモヤヒモヨモ俄の
あくわく産家ヤヒトスミミアリモサクナヒコ

沖つゝも山枯のちんか御ひじき草の妻のみくとあまうやゑ
いめもきの白つゆアヒトモサクネシナハ嬌のくわくみや
降そのみきも嫌なすつれ一草アラリモヒムカムモキシ
おくあめがくまうイはくひかとゆと妻よひでものわまぐるお
のうまおれら不にえと愛よばうと其川のきくと諸小わ
そひてニヨウキリとけニ粟乃中小さいとしさあるふぞやがてくろ

かづへるのくよおきてやよみの申もへうそりうららかまうる紀と
かあくらきどもははやくやへあくん水鴨ミカモをす住むい一戸玉晴の
火の神カミなちや母ヒメにハ産のさよまふ今ふアラシ一本ヒトツすてり縁児
をキともせもがそもと遠つへ松よしへえておきてひかくえも
ねぞいほんすばせんじてうらう枕方アラス足方アトベとけくすなくよゆ
も君あそなめく風のおゆまへすくわほくアラシまよく
きみり家アシタナ行てまよつるこな月のくの此日アラシびつゝとれん
くくの天路アラシへりくわりとめとひくはく稚アラシ子コノコを見アラシ
北野の山神アラシを納め奉る千首のうち

七夕

五月のちるのよしはまやうのちのうかく尔アラシみまよん

すも寄拵頭憲

笑ひよはなましかしなはくさや一戸のうちよがうてゑく

寄蘋憲

うきくらのよがふみれアラシあうひの行アラシもくよやあゆ鴨

因持

をうのよきくら枝葉秋アラシ實アラシいもほじく山アラシよもん

そらぶ時令

徑アラシよしと押アラシみうがわアラシをちの尾アラシ月アラシぞくら

梨花

かの花さざなぎある山里ハすもかくすみや風ふる

沼月

あらう江の沼は頬おそれもて月、うがははくらき
寄篠立
ましればむとくつる花りよまよまぞたぐせでよれる
秋葉浪雨

もみじのとみぢもみ頃のよそのゑうすつもよつ
毛白

もみじの年齋

尋紅葉

沼川ううちもらそりよるみはのよまがいきやうね

名所詔

上モせのいの沼めまきよいにばくかはそくのくをく

竹霰

あくねうつ音せわらへよもじてせはやまをぐるりまく

暮秋モ相

七月のかづきよすぐくゆく風のひうみーとそやまく

寄海述懷

いちをよ海をよ我いすむとよようはなたてりよハ

寄石立

水ミるみうらうもあへとみまかわれやうすくゆなみ

路ミち雀

まはれぞ道のくまびりやう雀アトリ街シテとあらわのくま

故宅五月面

来ミりあらはるは頃ハコトとまむれすすれゑり

早春川

かきえりやさかにゆき春日のかづか川カツカワやせ

冬邊月

そこのくわいがやつてくされど神物カミモノなる川カワは

鳥石めぐらすすめり

ま代ミタケもちのひかへとまの傳人トランてやま

伏見乃月不題

射ミ人のゆみの田屋タチヤを行てまくらひの月起アキ更カタ

まつる月

からすハヤシのともとんもきの月アキの月アキ

冷泉入道乃美うぐれもひめり残リマツみてよゐる

言ヒトのまのうハナおくるをすれどいづハナまよひとひと

そ懷旧

いよいよかうで冬のやまは行マハくわとほやうも

ちのとえど奉

黄葉をりてしゆへは京都で一夕もまうとゆほせ食

因ドもあひ葉紙紙よめ

そじまの筆紙紙のじとくにすらあくくらひ

伊予の風へはる人をわくる

うつまの島よ流をめびれでまきが行んけいその道
松前の方ア使よとすのとくも山院の恩春ハ
又まくであとまますをほりえよ宿モヒテマス

天づるいよかくもしソノのちの宿のまみれぞ
但馬までやきのすりる

たま生形のまゝ山よ風車されハ七月の末の頃ニヒ
あやうりをもすと都の人もまくも國の人もり
くらむを越ヌサシヤカモヤリスクリリ
ありうち春改ヘとすの時ア其のまゝ駆て山
もくもくとくに國みれど國もすねびりあほ
ろの二日もす遊びとく向岸の尾上モ四万石の
山よく見ゆる葉も見るすぞく松のむすみすかす
とまくは見て見る松のむすみすかす
あるえと階すくみすかす間ノほじの山風よみねる
ハいとくらぶるあらわくはやとすく墨のやがふれ

ひまむかはんとうよす家よりへおくよみかう蒸被なまやふ
ねんとまよづく妹やつてどま枕びあるこれせぬはるのけ
しよすく放魔カゴドものじゆうのあくまくはーもきする國と
人よそぐ妹もつりとけりしらよどりもてひくそくやくさ
都べしもかくまくはーうきとあがとすやねりしてぬむ

次の句へたゞある

さきすすへるすきせり歌ちもやす霊籠ヤガまよひやくす小
嶋シマめの聖子セイジのよはわナヤシとゆつむをくらひあう
す家つやううるもナシテ朝りくす朝のまくらひよのまく
あくも本をうて西す白晝すとすれやさんすがたくへい

ねくよひつゝくおぢうおまみて東乃からひくまもくす
袂スリうち拂ハラフひそす下シタくやくのはくまひつゝのと
約日よのばしてててちあは見るづうちイキスとけめくは
くふりもめとりくば相きのちもくすあらりへくもよ
まくよじは室ムカシ月やひまくうひうかはりくる日すよ草
ゆくよび行人を見つてすやは

夏もよひにねどちまううるもバーあんとおぢうりつる

艶雉アキをひもれとよもる

さひよじせざうづられへ向峯ムカシ井をよみのこ霞う春ハル
うづづくと母ヒメとひそわすの嬌カミどひつ枝ササ萩ハギの古

枝子いもちてゆく草乃すみう定めくそうせうす
ヨリ不ようちりつさう母のゆかまぐらひが父もゆをはくくみい
くつてもぬの葉はううくろべハ雁もみく幸男すよに
てあくくな真葉ありちすごう見ゆて又かをやひまけんへちと
ひらむ家よもちきそ家つゑりナ、うもくかくもる葉をすひす
ゆひくすかくものいとくまくもくともくかといそそくをれせ父
のみ乃ちくもりすはそがの母ふとくもくしよ程もくら
らよぶ日のひまくたちりりまふとく風ふきすりふくもれつ対も
すもらもおひのぐせきいふびわれよじみーと異親のうじき
うきて三栗乃中よむおりすら鷺うすくもひてねばちとくの

りみよりの庭せべりかざまがつゝもなちおきて竹タケ
べよもむかゆいねをもあくめもく水ミズもぬみて玉タマ緒
乃命ノミコトりづくリツクさくサクしすす尾テもちモチ叶ハタケべをもくらふ
うゑのウエノとトてをあれアレぞゾよヨはる翅ヒラハハれど天タりりすまスも
しらあくシラあくアクたドものほホそソせセみや鷦セキーイもモのうウれレてあアやわ
たる日ヒのうウきキもモくクやヤ天タちのチひヒそソうウをヲりリよヨくク魚ウニ
もくすまんマんムじジうウやヤも

雜言

もあつてそぞりよ時ノ庭の邊の、
モ衣尔大

アミツツニタマニテノ床スミシ小猪一頭のひよひよ
もたぐりててもなう、尔言人ヤキミナシカツモソシテ
河をもぐ行スアマムカツメジアチャモトアサヒモト
ヨシスナガのねとモウカツツヅクヨリモドモハ思フお
日す四をもつゝもモカモ古菜ホセナリテツヘイ文のもの
ちふあくまじとせびの母ヨシツカモクヤマカリ山行程
をモクシトテはる岩くら水モテ飲くほきあくやけう
トなんぞトモトモ人モ財ケモモレ骨モアラウア
サトモスモリタリ又かびこひらまよまばそくくわが
シテラ親シホリミナヒ本モそれの下枝ヨ上モアツコ

カカミサヘビヒヌムトトアリリシト
ハモトモシテアリツモモトアリトモカニミモモトモ
一ムヤサナクシノ萩咲モ秋づく頃ミタツア
アヒムカバ天モアリモモモモモモモモモ
ミタヒトはみてシバ椎リコヤモアモモモ
カモヒタヒナヒナヒヌエモおはのわきもくもな
ヒヒヒヒニ雪ナリモモモモモモモモモモ
て山名ヨシ木のシモモモモモモモモモモ
行モトナヒトモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモ

ちこくふともひとくわくのじゆくま
りよみうもたらすきのゆのからだ
さとて天翔を行ひえとて。や翼あ
るをもとめくやまらむとくわざ
ゆひわきてかくすゑふらんわくへ
せうのくも

けつねうえみゆかる鶴鳥としよめふ

まつりもよこくひす真木のさわら木の木の枝は木枝

ますみくおひしれすをすうおひ時もあらまうもとづくわ
タてのゆべへむりぬます朝たよれがくもあく
てりばくとろすよやうじふくをらひよ葉うみす置く
のうちばきのぐれドものまくらすあら
るやうすく小朝がそ下雷の山はくとくらみくら
くるて、もと京ハ凡よか
しめをくもぢすもとすりきりそつてのをひもあづか
やうほえくまくらむらすいあくよも安と往をくもひき
ちくすうて天宮のすくとくとくび本の浦はうちづらひ
たまき持くまちの岩根さま木本の根やくさまは

まく渕つまくそれもとてうるわ
うりゆのほとまれひよるかんくわ
あくまよらむうりとらふせうやひてくまく
わく山ふくわらひとひそまおとせすやあやまの聲
たまの國むせの里ふ来てこゝの白うね振りゆくとて
徳津^{ツヅ}の神乃あくます海じよへるみまく耳^{レニ}まのゆう
もあくめいのづくわくうきとく唐をもさううづく波千
きあくへきく常世とよきそぞくわく其一まぞさくもさく白金
れ玉の枝さうえさくざく赤よりまじりぬもまくちにまつまく
朝日のかくやナラの日の照れるうらの時^{ハシ}ふかどひぬ

とひらけむをとどくと舟よそひ漕も見れども漁の舟
りまやま神風よりふるやまやいへ舟のむし今もづも古の入
せひつれひう耳ふやもしやよど寒み乃事のれ吹風乃
やくやくものぬうちをせあ國シナコチ遠近シナコチすむるか聲なこ
なす常世シナコチ行くとすくわくし行てシナコチ人の言のすとく
よひてわくシナコチあや但シナコチるなるまをすかくはせぐの山よらるやまとこよ
尔シナコチはひきよてせ見れシナコチぞくぞくありあへ岩シナコチ
やくべとかなシナコチつりとせう申故シナコチをすもとよ往シナコチいてひづるを
こればこうのゆそくのくきぬシナコチ金シナコチたまひきくわくう字
すチシナコチの百シナコチねアホひもよやくつけとまもとおじシナコチを

アミの夜をもやうとよたうとかくよつてぬまよんとゆまされ
つらがん民もあらなくかくしめ常世といはへりとせれとも
靈ちよ神の声辛もてアシカラガ、あわきしよいほくしゆる

春ノテラルル

いほ波千をりみとみ井の日の秋をよよとむのたつて春
春のくもをみとせしとやまく

沖つぶくが枝の月げと来てよきと柳風をくわうじすのよく

歳乃暮よす

さくちの春のなまうよたゞてハそれかくすの安むらうつを

夏山

まの山ひそくも渡アタはよどむ林鹿乃田井ノ向色さくすも
署人を送る

園の声の向くるをすすりだらうす常て一いとひやうだゆうと
うな月ぞくも

罪や咎も今あそばへ速づひの清きもれ残これよたぐく
清きもす

鶴川

松ある岩牆さうのとづよア鶴さす乃からまやも咲ク

清きもす

足引乃山ありむちむかへきゆいの清きもすいてせん

松浦さよ姫

追一ノも船しやくねじやううおひよのく領ややうえ

仙

やうすせき藥アーバヘンジヤウシテシキ

調布

たなずえの席アーマサシタモタカスシキツ

夏艸

ナリタミのモモラシドーオラスシキツ

焚

いとまゆみーみんちかおうそり草モラシム

海

いすゞもし鯨ちみる奥ベアはまうろーくよ三日とほ

王昭君

カニ海のあらき碟アモリヤーイモチモチモチモチ

ゼリム内

秋叶サクアリギムヒリウの木のシハリキモチモチ

いはぬ

百たうすいも高もヒードリバクのじくわがふさ有

衣おぐ

君づくめの衣アホモ残すて候クヒモキモチモチ

七八

いほの漕らん船フネに林うる吹よむ、うそもまふもまふ

日記

タツのタツをまど日かくしのまてあく森ミツ林フネつまつた
タ月

タツのタツをまど日かくしのまてあく森ミツ林フネつまつた
ム士

山行サンキョウ一月をまど

舟ボウと行ハシ友チヤウをまど

秋アキとも月をまどみじと舟ボウとけでまくべのノをまどとやひり

尾テ玉タマ

うの園カケラをまどうれす秋アキ月ツキをまどうれんとやひり

秋アキ風フウ

广ヒロきの晴ハリてあくこもひやうの葉ハタケりやさ秋アキうてごとまくれんとやひり

浪華ナガハ防サキ人モノをまく

大君オウゴンのまくらかくまきうちの後アフタ華カハの浦ハマの舟ボウとけで行ハシよ人ヒトのこ
せ文モダニそかはなハナとばの身ヒトそねはせよ文モダニはづのハズノのハズも身ヒトは
へうすせうすあもとの立タチをわき小空蝉アフツツヅクシの妹ムゼもめむメムもちも
ちやく兜ハゲものモノでなまきみらかくまくぬご隠カモヒのあまうも

のうをゆくよきや

木の上のみつの隕松もすばりそりらんいとこものあづらふ

まちたん古そりがたり

咲きるらきはなれどいあつてあかんはまのじうき

萩

秋うせとよくまほぎりも咲サキのちづれさまでまやしん

蟲

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

秋山

もくもくのやておちるる秋山の黄葉すくなくなり

浦島の子

もくづの木のよみまきそめがとひくことひへり

大宮

青はくともも笑をうそひまくもとみぢぢくくねみやまう

ちを寺の萩を見より

ますくさのくさびとくさのくさのくさのくさのくさのくさ

らく月

天地よりたゞ一いつの金月のうけぞりやまくつき

厂

小山のへうきうちわまく厂のあまてうんぬいまく

鹿

枝をうねるやうに山すすめがよもぎ

紅葉

とみちもくちくをみえそ標

手向

まくらあひたむけはすゞ
右をひちへよやうとくわゆれなじね

夜舟

ぬも珠のよもづれまつまわゆ
月待とぞ波すあよふ

鹽
目

海にさくまく、
空の風ふりは、
沖乃木

和凡承人之也

わちひじめてうみーホいぢけもぐふよだくひいらんくさきまひね

みやづのれ

よいかくうりとひえー、つかひ山
ぢとひづかの鹿おひまくわら

池

秋はれぞいのすまたくわいくかくはひすまがつ、斜
じらゆきるぎきうちひく
を

小山のほのく小古きやくちも

山々やみうらむちく大宮のをし行ふね、もほりきみのゆりあ
アツてやうじのやうじのやうじの色もめでゆうう、みやおはやひ
ア秋をとすりぬれを、奥の山がすにへきう松の穂のふい、なま朝む
うりきの山びく、齋宮をええ給して松がとすりてす、きもひ
るのむすゞ大陽、まく霞色も、ハ陽は尼古百のつうちへはよづく
とみぢうかとすりて太陽、うじほきもとを欲ひます
してク星の月、みびく宮所べりゆうそーもゆ代のい
とくまねと年月の辰をなす、お屋ハも和まびしもれ
ゆと神のたまうすもみねらやううはれは山神ハ山りうよう
綿足しもくもくとゆくや、三毛り野やまく、紅毛とてすみ叶

べよりみすすもがん天孫のたうのゆく深をそるれの花、
みれどらうぬうも

百トもみたまじゆありをさう、弓矢のひそまくはくう、故
かねとけて遊びもひ、ほそのふ乃比の中すと草やもえくう
序製のとみぢとくらむ

山うだう、う、ちもすじやせ一枝の、とみぢつちよ首を

ゑふくふくぞ

ゑよもる草のゆくを被り、うけてふつちよくとくばすと
もみぢよがくれのるう様そらるゆくとくとくとくとくと
せんじようあれよあよねおがはぬのひのひにえぬなう

ミサカ山中で見ゆぢやん

官化の模のとよ焼ヤクごうちの細スジのかいやがくをのまかのこをそむ
アハ右シテもトモトモむづくつう言ハタキてあわせられもナムとトモんと
内シナ日ヒアヤ都マチアモトテ天アメらういなあとアケルセの鷲サシの我ガもタキテ
幸ラッキをアタマアタマシキシキあ山サンオルヌタモ行ハシくきれハシくすがよ津ツ
ち業ヨウえ山サンアシカミキモアレモ波ハモシテモテモ波ハモシテモテモ
アモニテアモニテ錦ツバキア寺スルアム、有アリアムの山サン

十三夜

一
二
三
四

中はのよかくもぐらう

うと見て云ひせをよみハ梓もいそちへよきうてつまにいのやまと
玉の落せ命アユムレ世ノ中いりくそぢらうるうつを立へかくそも
うぢゆきすすきとやうりひさうえく舞しもえよまくあやとめこと
かく椎へ山きてまきんぐくはせよ山のさうも折てまきん秋かくは
高まくのぐわさぬ歎をねても着てんかくくもそくのりんとうは
あすいほくとくて家ゑやなくともかえや一里かなくも
ま枕さじくまんとつままづちつてうやへるつゆひづよと
こもがおまうでまくとくづかお日をふまさとてまくや
りまうあんとまくもたまくをまくぬ陸かうも山ゆもさん海ゆ

うそは一ひとも妻子といふも見えなんせハラマ
めとみのゆきあひれむかへぬもせてもくめちめくん
乃りや

鴻の巣の隣アリヤリモ白鳥アリ

ト西うやのなまじアツモをれでモ一めじムカヘタバ
人の庭アリ山アリばなの植てゆりされモ
山人アリ山人アリ山人アリ山人アリ山人アリ
母か月を失すひるい一人よ送る
たるもの母ゆけよし老らぬくらうとおりよまうく
浅るゲ嶽岳アリト一見く見しれど

おなめぢにまうごナキアキナミナシアキナシモジヒ
トアキヒ緑児アシテアゲビをれモリルヒシヒキレモ
ミドスア似トそれぞと思ふモモテアシモモテアシ
ヤモスのきのゆゑ

今いたゞみづこへなき人よりかくるものうつりまふ
あかやわのひきんわさよみとまちドトモビアガレ
その事そほ壁一ゆくわたくま、あつまやあやまえ
おとくの人、命くくるを

稻もろ川崎のうじよかなみおもつてのをまたむり、も
朝日よの山もておもひすの梢アリテ一ばくも嘯

そとひのまへ一ぬびへもはく相模りやるをまゆるあら鷺
えぐひをみのゆきこえかせばあへうれよあ風土のね
いは潤よある

君がちのまきうち岡をや川とい継きたる神代より降り東
さきの不二の木根イキミテアリとてとてまわればふ
もといきえぬその君のゆきりぞくする川にあは

伊豆乃浦濱残し

とかれがらやお日す浪すむ伊豆の三傍の伊豆の岩も
しら波乃キトシルニ保づ崎松のみ小町せずど見る
すらうるいのじつすわをあいよめくにれぞ

朝日うげ匂る山すまくのぞきくじらひうきひすの峰

山やの中山

時ほ風すくすくそりあはりすらすけのくみせつるは

るよおくれて行と

よきこくわをとけうつせみあがみのてりうすも
すく山をくわく

すまくやる音しとやくも一聲すくの山をひたそめ
はく波の波音のねくよすく音にまくよめてきえすそやうる
さくはのち津の宿すそとの下をへるをもつておもひ

山へたまて

うち日さす如きとひは是引の山川はらもやまきまきま
大ともつてくやふを

うつるよとあくま本いわへりの山川の神やまくもひつむ
石よすすむらいほひ

天地のうらわねじ玉ほこの道のじうへとゆはよし徑ん
てくまゆのくへるまかとのまくまくで里ひ入へよなよそぢへ
民まのおじて一びんやまのぞまれ

うち川まで

めそむのぬくもれてもせよの直アツカヒ川川のよ

堤をりア

づえ川のはまうづくきをやうためいよくようであるよひまき

古梅園う石渡墨をぬる

くをはう鳥越の石と氣のよすもてつぐりすみをくらす
喬枝め^{イカルエ}初歛すもよめのよす

ハキのけうよんむくのむくセサセアツモヒテ
吉やくくやくとよさもふまむ

岩うのせやまか一石ぞ二くやめ山川のししよてぬを
ほくの山のよのうのをすもしもはくにまくみてあく
雪ひみなむよゆうひととなくすみをやうくんまくくやめ山
まくのみそれらむちくうすよつて川でみちどりちよけてなむ

の山へとて山へとて山へとて山へとて

糧もくお前やの寒いほめの下うりのりんもくつまいて
の官のをちどりよらと申すニ吉せを名ぐる山と神がくわ
をくみてよりくみせじゆハジくうこの天のササモ被りてまはい
まつて山の神もううんせ山のものはううひきもし見るま
官人のからへよさざくとも黙てはれとをうんとく
大は食りとてやあきみじとせ川篠の年魚子今も走る

南の宮ことをくさり

日はそくよ二の残をくつ吉やのまよま桂やくくまてま
かくじこなえの言とめうすまくでやかくよ心の妙ひ天

きのからうらうぬ民まももせ不不雨らむすふわもよ言と
いでくるじきまは一年月のらまくぬれどうかくふゆ軍おこし
勝ハレもよくおれのまみくとたきむらぢましのふの八十も
の男ハ立もうじりかまよるのあときよつるまひ呼歌の先ま
くつ千ぢの人あかでもて比の神もぐくひ皇神も憐れう
すく三軍抜をくふのひぬくれども時うわんぬく候に
の山のやるのべの南の官へられよるう
あやめれらのまよすすむし居てうるもつねもほも
じくのあそくわくらもくも言をくほせばもくさん
三吉せひものうましむなへ波とみすねのをよのけくう

うと人の行ひがとくのうのもよすみくそがうのへ
岩をもとするをよめ

玉婧タキニの衣アマとびつ鷹タカドとのくくとくのえすよばれ
や春ハナもの咲ハナむとく現身の世セをくわくわをもとむか
風カキとあお君カミを舟ボウと途シテまよゆゆうもつてうめく
うはりて音オノめ

きのじよすとせはすひいのりむらるる奉モリる
大和ヤマトの國クニ中チハちうくすう

みづやの山ヤマはうきと国クニみれもふのこすよ三輪ミツハの山ヤマ見ミム
木キのりとの秋ハねニモをもすと

このととくや神カミもなむくともいふ

三田ミタ山ヤマをもぐりて

すき乃カネの山ヤマはくも、くはうちのすくもん
すまくはうぢられてもり朝アサの風ハラのそじく有アリ、も

伊勢イセの浮ハラ神カミ奉モリる

母ヒメじもなきくいよをすむもすまちくわきいのりまく
山ヤマりして

古コトはとへとぞしやらぬます本ハタケのれーきと夏ハいもく
いそくぐととこひそびて

山ヤマのきのつそト原ハラをこよへもくもくみくわく

朝行とく

おきよそむきうるれしはまくまよあくらむ山やそりる
庵よせをとく

かまふせうもうたで一時りもいのむくのまふりわん
いらへ山もくわざとをよめは
あほくとふるふはりととしまくらうはよめがよめくん
新迎サカウゆまえのゆ帳じくつせりふ

えづく日のす國のやすがのあはすまつてくもやまよりん
大とくふれよみすく

「」のうがをらむらんもまのまよみをつ

柵の尾よく

花より人トとみねど春の日はも闇くらむとくの尾の山
やはくの尾りづくのくらく

冬のみゑ家

秋うきうつゆトもおきそとくやうのまむひ家を年ハよつ
ハ階のゆ山トりおきくふくひきよる

おのきの秋とくすす、つまくさく

そぢよのほひつゆす秋とくすくたすが山トも
月の清よよ湯はのゆくゆうりてたひとくやうくて
ふえをおもくやあしてりめひとこがねとうりよ賊の

うちよのやのゆく海とみづかのうとひて
よまとやとさん

酒のうて月へもどりすがるすあらうが海今わくまく
月よどき舟にてあらざむ浪華のうかうばゆうさん

大津うく月をして

ゆ波のうのたはううみのよひぐ船で月よまくつら
やくしまくもやみて

すまくいじのやううふれことひの月をす、
海ありくらひすれぞ、さうのやうのうす、船の音す

タとすと達云

日ひのうのううう達うなんを、よアモ月もくううう
ううう

貝むらうむらうて、あらわくおやうとんが、ちもくして

ゆうなみご

やううもあらううえのうよかく、し袖、くわうえ
つれあううひ

岩あうへんゆとせ、ひとこれ、まつめやううう
いくれ

搖くしきうう、山娘の林をゆめうううううう

五九

かくもあはへじゆつる
まゆるの甲のみおもすりぬく
かくもあはへじゆつる

立秋

更衣

花の色をうそついて
衣しゆさう(ま)の形見うに似そりえん
一もゆあうば小春の立るに手のひくよめ

山家のりすら

見事である。うち小黄鳥のうするまちいせだけ、うりを
うのゆえんとへうる羽りすみかうくもなさへくちやうめる

七
ナスカノヨ

みちとりんまのせやもしらへるをもひの山と
七夕セイカノヨ

すの川はれとあらうとくさはゆくや
あまのとくさりふたの川エやもほとのちいわうりん
神代ミタケやうえのたのとくとトがるまの川よも

水

みさうもよひはてぬまひかよひえすほ

三

はらふれうをものにやりや新月とすくらむ山のと
おきいはうみをほくぼす暁つるよしとよそあらむ

井乃蟬

しやりゆはーのほのすーかよ本末の蟬もタナヒでなく
絶達ちひ

ひめうてまほきとくまつれゑはは神こうじてのするをこよ

箭弓

秋はれも日のかへりと、かほきのさざわやと、はじりりり
とるの翅と、ととなりてのたの河原の味を見ても

そぞの山をくぐりぬけ、杉もくわぎの木とくらう
山はくねくのひごとくえをひ入るで月をなうめうめ
家さうたじくられも、石とあるらと、あはくぼくと
さらばなみのをくがよねえで、みみみみ神やうちまぬ
遊翁君のまよごのかへりても、ひぬことやまとくらうめ
せの中のうのあれを、岩くらむ松のちとと作りたのまん
くらの桃のううび見て

きのをかくとくめくめくいめくわくと大珠のそる、すね者

名所

みちのくとくわもおりぬ却じやみや、あく令経てあらせん

かしお

らくらくちやれにまづねむとしる木の葉もとぼけ
きらきらのまくはりて右のおぬふたものほ
う新をおこすあら

君やまとまでりばいほぎのもよみくわすへ
大をやをほの山のそとてわざりくわ
をの山をよめら

あを十八題

名乃山

志もくしゃまよらの山の木の葉おひくわする
その樹

すの音せ漬や風のまくはりをの声よこへせぐる
名乃樹

まとうよりよよわいの木のりみぢりよもよつむ
そのもの

奥山す木の室すよもよわいを黒ふくわする所
そのもの

そのもの

きとればうらむりのうるおの帰

その物事

いまほの一本木でんねぢくを残すとみちの風ナガすすむん

冬はす

あくろすの木をうらまとめつたとうをやうじ

冬のひ

けみれどもかへる日のれよすじのねをうがむる

冬の夜

自らひかへてやくもたらせんをふきよつむてうねん

冬の夜

そぞそよわす

ひとねまでくへあへてせのほのよこせんかへてゆけば

冬の月

山うねのやまとあちすふるふのをくもこの月

冬の月

ふうの風吹くふかくのよかへりやうて西をむか

冬の風

草木の葉もとくかへるよのうよあそぶ

風

さうすまもとくかへるよのうよあそぶ

虎

かわくよみがへりてはく海にててくまく

水仙

まちやくのむかしのまちのむかし
うきよのうきよのうきよのうきよ

凡てよしよしよしよしよし

春風の面風の面風の面風の面
冬月の月月月月月月月月月月

卷之三

那
一
小
子
也
是
不
好
處
也
這
事
也
是
不
好
處

長岡の官又清之

二
いさみのよしもとひまわり

七
夕

あともうひとたびおもひをよみとすゆゑ
あ耶井のやへふりまわす

ちくわのうすにあらわす。かくのうすにあらわす。

らぬかゝる人をおくる

秋風の吹く
ゆめのこゑ
かなびの月を
望みて

ちよしもひまうじまくかくも

氏家ぬ——ユダるこいも、うめのまのやとく
むすびき——人たう

行き秋をよめ

秋はき秋庭のちうくあれどもわざまくらる
いとしやをうてくるや秋森の木立あて壁
藤の木の昭君松あのものあもあててトツモ
おくとまつてよめ

仇さるくよみそかへてもとやめよがそ善言のよ
たはやを一日の山林すばらそとくわほんこのみれば
葉月のきみねれはるまのこすちうく佐あるなうな
うのびてはるまゆめりとくくよめ

えくわかまし山のくよば耶の日ひりくはるまくよめ

房やうのるつまつて

大きく入るよがりは見くまむにこの向奉ヨキ一月の

宮路山

秋山の林立ちりせいかのものあらわすとくわ

荒虫めく妹もくもく

うりすて山ひりうきくすよ夫のあらわせ妹のわれや

くわんのけ

峰をくまみぢばすよくれのあらわせくわくらえぬく

又のやくもと山のふをくわくらえぬく

峰あれもくのあらわせ峰うて峰みだ葉はうくわく

紅葉をみてぢかに山祇のよきのすやめうやうりん
ちゆき妹鬼うのあらうもてひのふる風ふまつせうる

旅のくぐれ

行はな蓑もさすぞ足下一枝をまつてみゆりや人のがく

みゆ

水をかくしてねむるよいかわれまちとそくまりる

草葉

風をこまつてものちよしに因ふよがくと拂ひあ
その来て本の草むらかく山猪のかよもえますまく

月さむ

雪やさんちくやゆくんまよのうとくやう月のかく

そな

あくめのちくよへりとまえくれこそせかな

初雪

おくじくよしうくらひそひそくためのをなす君のちくせう

ちく

いほのくらよつよもひすも佐保川のちくよこてくよけ
浪もあまいに時友が顔をきて口くみでまく

歌よかよかよかよかよか二十首のうち

芦のりあるらみてぬくらへくらとまよすすゑ

伝の舌のさへ

すよえは岸（シマ）よたてるらくをしかるゆづりうろじのく
かみれ腹（ウツボ）ともやうて死ぬまほとらひ
かわうけむらしめのふのこやまらすたぐせ憐き
はつちゆよのをくひて味をほおぢるよやゆよめ
あるよ

和而拔地（ハリハツチ）少く唐言

言ひきすほりうきよからすくちよりくあうよあく

従軍行

かのよのゆきがまくねくに夢ふゝ妹を思ひうりも
かのの人のせまくとくよみのうとめてもあ
かののゆはうとめても

かのゆかゆをくもかすくよみのゆうかうた
浪をくもかゆくよみのゆうかうた

川（カワ）を水踏（ミダラシ）し舟引（ボウヒン）のぼるかくはり（カクハリ）た
たお

草漸青

花よそくつゝる草ハ皆じよみがうせうせうせう

友山清水

あ下（シモ）て山（ヤマ）かくばらのよ下葉（シモガサ）かくばらのよ下葉（シモガサ）

日夕もくのくまかくさむくまかくすの日をうるわ

暁あけよし

ふのとよじも朝あくくよおれとそのれふ
えきのも

きのとよじも^を流の上の舟船はりくをくわよん

山中みや花

みづこくをれをれち妹う家の垣つうのもねほやうも

山上紅葉

みづこくをれをれちのちねの紅葉をれどよん

山中みや花

みづこくをれをれちのちねの紅葉をれどよん

春よしと妹うくる梅の木あらすみにうへるをりいはえぞん

着てく達よし

きのとよじもひじゆくへ次うす夢不しれす(のり)

歳のそれ

春の風と葉をあきてをまくとくとももらすくへゆくやまくえ

もくつ

まくとくとももらすくへゆくやまくえ

向のこ

さく流の風とよじまくとくまくえ

まくの君

ちまつむと小田のみよしすらひれ端つゝけばほのをぬる

山海經

まちのすこやかちやまから山旅のをとれるものいりよつん
も頂山麓おの原ともうみゆくよ家わらめ移のくは
春やとすもなほ見んとあきへー山を、今ハツちとせます
東山アサヒてあるを取る
つまむよ山の木、いましめりふとすのちかの木のあとも
みゆかあくつかともせ色や、松、根のねまくさくわらがもた
えらぶがうと、こましまくらばんとあわくのをつくりまくしてたの
トもやめさん夜よのたいらの宿や東の巣シヤよせほくと見ざ

くふそよごとくひそりそねばせらべ
みくらうのまのうゑあづれしのびのとくち川
のこのを本せなまてすきくふやまく
あらゆるうむかよ並み山の國

豊の貞と、トトモの善もよ／＼よび
湯鞆め——またよどやかにけりす／＼おくる

天にもよそへと向ひて、いぢりよつちとやうわくら、ごとの申す
うえんじあくまくの神そばにいたるをみ神のうきよめはあらむも今
あらゆうきあくまくのすえはまよくめふくらむよみづぐ

うかくこまくかほりをすすめかへりて、うるまにあわせ

柳の浦の景へを寫すとある

そひゆいひつゝの國山なづき眞木の葉りく海ぬみ源こす
カナシシテはよすきふれひあをもるお祈とまつむじら
ごえまれたばうるひの木にあれとまつせどちとせばほぼてあ
せの、千やもの雄もすまくまくまくさうきすがくよゆ代ま
つほり原燒ハラヒるものかこちあしゆなすつよまひ千年的
雷たのせざハシのりのりよけぬべく言ひてきとくのうらのそ
ふやなまくぬねぐててもヨセギスアヒトヒルヤレくわ
レシトモトウトと若をばやか一まよすくまつやくわニテ鷦
をすめよリハシやよがきの柳ハシくふくわみのひがとるも

うしていよよきのへりくあらのすかれと源のうち
の船カタヤマ吹ハラハラけ津カタヤマと沖カタヤマはまよまよま
やのえのち東カタヤマと向カタヤマ島カタヤマくもとの絆カタヤマとくつなまにし
りやまやま玉爭カタヤマの海カタヤマなむひて、うやうやうもとの桟カタヤマをう
ねた舟カタヤマのあかなれもすくわらなげすくはいの海カタヤマの
よとなカタヤマと消カタヤマなすくらんすくらよ大王の龍カタヤマのやこのよも
つるあよせすくろもねくらうわいあけやぶざすくらすくら
くもうの駄カタヤマれぞれぞりも

よざの潮カタヤマち波カタヤマく幸カタヤマくもうの波カタヤマとさけ、波カタヤマも

サアのやのをと免塚を見て

ノキノのすまほりんを枕にびやくのさんからゆやのちと
かりもづま室は一みれど日とよまくれとあく一うき引の
峰えうくわい至う月とくまぬその月とくもくわいおき
一あまくまよがつてうやとむのびつう生ひての松
の木のさんへもふくさんてうづくみをうよもくくやせ
めらんらぬもむくへゆく條のさんらやうつけよつ
やくもく松のほ白き衣をてます男の流れをきうり旅
人キナリてつぐがりと泉のふあこのゆじとむらうきて
らくよりやサセ朝山^にノルホナヒてのる残あまくやうまひ

をとくとまくとびとあくとあくとひとあくとえれと佐とと
ちとまほもゆきとあはくととたまゆのせんすがくとま川よねち
てゑりるれしやもおそれやをとんとササよづ袂とくとゆ
じやくつきて死^レを御人のちとおくとてうくのとぞおまつた
道とおぬをとめ見をうみまきひつゝれとよもよもく
やうれをとめ見をうみまきひつゝれとよもよもく
アとあれととひゆとだかくとや君うそはよとくし太刀と
もあようさるわじこうとあひのとばたやとそとそとふせん
とようやまきと一うやべちぬをとくとくもくねびのびをとく

りへつゝまくらすまや向へるやんを力のどづつあるへあらへて
あよきめりてますまよひかちのとよみのれをつまよむせえ
白毛乃かえりけりるにとね、左力をもうへ家ふれいみは
そちくじる三栗本の事あらひきのとくの帰と今しきとてほのせ
ヨツタヘアシガスムよのちよハあれど、ちの帰を見つを
れども、一やめほ

おはなにあつたまへ、おはなにあつたまへ

敷盛の墓をられてよゐる

はのまの國のみちのよつゝへをとよこのとづ都をひづア
そえ、下あやへたえすゆれどさの井の命ハレとぢはよや

やくはいのあまめをうりやうるやうの平の宮やたのふ
やまときて西ノのとのじよの名小官を柱スルとせなま
もろく大城オホギをうちうそ。中よ平のもよともの男ハナ人す
足江の策をわくく軍イケワガビトを立ちあめがくしきにほをすり
ひ源のもの伴の男キミのくさくわくもじくもか夜ヨロシきよ
るふ足引のくく山の山のちくもすりよみけりトカ一燒太刀乃
くもあもし功ヒサシるもよた城のんかざものとれはすまひもも
のまわらうよよらうすれたりをもよせかトヤやまをすまひもも
船ボウをもひよるもよもつておのづもよく伴のもよ舟ボウ
つよしゆまぬせよ、おもれてはよ。やし大夫オオキニぬごふの

ゆうとひのうづからくみ際かく船残しむればいふて
船人かあらまわせねどくえ御みづくつもんとがりむるす
きりるまとうひとうをみて能をうひしよぞばまらざ
ももばなれやまくらるお鼻アムヒツタマハラスする
てまがひの上あすまひてむとめうしのふのまのい
のちかくぬきのどかくらへ本のぶえすす君からしきば
名もくじのまもてせうかくアフリておうほくもつた
けりまの代アフリてめらくるの上あくや一路残るまのま
ありておどりをますねまきみ秋の日おとこひきまた
ま鋒の刀りんもくねばなうじかくすうやめりとやら

すと世の人のうづからくまくみまがはうそか
がく
すまのうづからく官ハよろばのあくみまうびとがりむるす
うのま一の名のうづからくをしまさうしてそひやんうも
あづるの端田川よだたまうめうやまうの墓をとそそ
きうるおのふくらへようりうらうとまよとえす
走つてうすまざらへ年を一様とつての墓にこ
とく入すくふりやうまよとひつもの人ハくちぢりうて
百人ほひのまのまかくわくとなり人のむすびとまつう
なまのまことかくとわくとくのぬの命おねむごりうつう

をせん白枝のいし残もと、まちゆかひすれよみゆきを
そりよじまく、うまはととれひきり人、ひとともうはやたも
かととくじのちよ、あてぬとこのまつみれて日も暮す
とく、さけ目のゆき、すまんがゆへと、ひよきうへを
そむすまよぐの玉壇の岩根ちがく、圓くそせりあひの山を
あよなはく、ゆくえまうなりとすばとよもすく
うくく、うれぐ、たごめよすよ、いす頃、やまとあ夙へて
つどひ居すうそづづりよらう名のうちのづちういづをつ
けてりゆうぞとまをのく、せりをくん家をのうどりえ
とまくそく、ばやもくびげせくとまれど、暮の入るがたま

ありすややためにひづれて人よへば
まへりやうかちのものもあつてまへりよなせのとま
といひまつてくわがまどりてりえのるゝちの形見こ
もぢくいませあるくまくらんアムルときつまくみ
のち、ひきこむよつてゐのうもくちをうちめ引れ
ゆめくまちかのちあやな王矛めぬのぐちくく岩
まくわれる様よりづくなすす柳こよひゑひくかきと
詞^{タヒ}くわくおほもの家をものアムラカマカマ
うくわくづとせやうて王矛へるつよもくえぬ
れもよくもよもよひふ法人もけくも神すこひま

びりすうへつゆくへうみもと玉禪うゑと
あくやあちの名とよどわむはうかくらるバ
いはんすべせんまくよひあきくさとのまく川の
きよ奥柳つゝみんハキの入

あらのみちのびとくらうとある柳うヰよみくさの

寛政八年もは四十日ゆきり田原稻生よみてましぬ
こハつち友柄山岸安岐方口口と人のもなまくやる

